

## 健康についてのアート

一つの新しい「アート」と一つの新しい科学がここ四〇年ほどの間に生み出され、それとともにある新たな職業が生まれました。一般的には「職業」と呼ばれますが、私たちは「天職」(calling)と呼びます。それは世の中に何か新しい必要性が生じたり、もしくはある地域で必要とされたために創られ発見されたのだという人がいるかもしれません。でも、そうではありません。その必要性はこの世界と同じくらい遠い昔から存在していて、また同じくら

◎「アート」…本書では、英語のartをそのままカタカナで使用する。看護のアートを芸術と訳す場合もあるが、日本語の「芸術」が意味することと看護で使うアートは少し異なる。英語の辞書でアートの意味を調べると、複数の意味がでて来るが、看護で使われているアートの意味は、ウェブスターの skill acquired by experience, study, or observation

い大きく、しかも生死に関わるほど逼迫したものの、すなわち病気が要求しているものなのです。

「アート」とは、病氣の人を看護するアートです。「病氣」ではなく、「病氣の人」を看護するということに注目してください。これを専門的看護と呼ぶことにしましょう。このアートは、通常、内科医や外科医など科学的知識をもった人の指導の下で、女性により実践されます。「病氣を診るのではなく、病氣の人を見る」ことが、医学と専門的看護の相違の一つです（もともと、ある医師は「どのようにして肺炎を治したのか」と尋ねられて、「私は肺炎を治療するのでありません。肺を病む人を治療するのです」と答えたりもしているのです）。「病氣の人」を看護するのが専門的看護であり、それを教えることができるのは、患者のベッドサイドや病室、病棟においてだけです。決して講義や本からは学べるものではありません。ただし、講義や本から学んだことも適切に活用すれば、補助的な知識として役立つものにはなるでしょう。そうでなければ、書かれ

つまり「経験、学習、あるいは観察によって習得されたスキル（技術）、オックスフォードの Ashlin at doing a specified thing, typically one acquired through practice'（つまり「とくに実践を通じて習得された、特定の物事を行うこと of スキル（技術）」だと理解することが適切と訳者は考える。これを表す最適な日本語を模索したが、「技術」や「術」でも、その意味を十分に表すことができないため、あって「アート」とすることにした。

◎ 「天職」…本著では原文の「calling」を「天職」と訳している。しかし、ナイチンゲールのいう天職は、現在の私たちが考えるものとは異なる。それはキリスト教を信仰する人が神の導きとして強い信念をもとに行う一連の行為であり、その意味から看護は単なる職業ではないと述べているので

## 「三重の関心」の書かれた背景

『病をいやす看護、健康をまもる看護』は、一八九三年ナイチンゲールが七三歳の時の著作である。当時のイギリスでは、看護師の登録制度をめぐる政策論争が続いていた時期であり、この論文は王立看護協会会長のクリスチャン王女に捧げる講義論稿として書かれたものだった<sup>1</sup>。

ナイチンゲールの生涯を著した Woodam-Smith の記述によれば、一八九〇年ごろのイギリスでは、ナイチンゲールの成果に誰も異論はなく、看護界に及ぼす影響力は絶大だったが、彼女の提唱す

る厳格な訓練形態では、必要な看護師の数を満たせない状況にあった。一八八六年には、看護界の一部において看護師登録制度への動きが始まるが、ナイチンゲールはこれに反対を表明した。その理由の第一は、その先四〇年もすればそれにふさわしい段階に達するであろうが、当時の看護は未熟で組織化もされていない状況であり、単一の基準を満たすにはその内実が雑多すぎたこと。第二は、この登録制度が試験のみで看護師資格を認定し、人格の訓練を無視するものであったからである。

また、この論文は王立イギリス委員会が提供した女性の仕事に関する論集に収載され、一八九三年のシカゴ万国博覧会で朗読された。<sup>2</sup>同博覧会は、コロンプスの新大陸発見四〇〇周年を記念して開催され、六カ月の開催期間に二七〇〇万人を超える人々が訪れた。さまざまな領域における女性の活躍を求める運動を反映した「女性館」が特別に設けられ、女性のためのさまざまなプログラムを目当てに、一週間に一五万人が入館したという。さらにそ

◎「calling」(使命感): calling は「病をいやす看護、健康をまもる看護」の文中で、「看護師が晒される危険性について」の(3)において五回、また危険を要約して繰り返す述べる箇所で三回用いられており、それぞれ最初が“not calling”、一回、それに続く“calling”、そのものについて書かれている。<sup>p.029</sup>(一)そこでは指摘されるからするのではなく、正しく最善であるという崇高な思いを満たすために自分の仕事を行うこと……高い格調を維持しながら「それこそが自分の天職……だという事実を確実なものにする」ために……目的と行動を共有する者たちと……のうち共感(団結心)という絆が生まれます」と述べている。

看護師が仕事の合間に利用する「ホーム」において、技術的な指導とともに、愛情ある倫理的・宗教的な訓練が受けられ、物資が常に提供され、共感に支えられることよって、看護師たちの意

の後、この論文は著名な慈善家バーデッド・クーツ男爵夫人の編纂により出版された『女性の使命』に転載されている。優れた看護とその訓練の必要性を強く訴えた内容から、イギリス社会のみならず世界に向けて看護を伝えた論稿として、多作だったナイチンゲールの著作の中でも特別な価値が認められたものだといって間違いないだろう。

ナイチンゲールが「三重の関心」(threefold interest) について触れている論文は多くはなく、『病をいやす看護、健康をまもる看護』の他には『書簡13』(一八九七)があるのみで、いずれも七〇歳をすぎたから書かれたものである。書簡は「address」と呼ばれ、聖トマス病院の看護師と見習い生に宛てた半公式の教書とされる。この二つは対象とした読み手も書かれた目的も異なるが、看護が陥りやすい危機について語る文脈で「三重の関心」が登場する。また、看護を「calling」(使命感)として追求すべきであることも、繰り返し述べられている。

気は保たれるのだと語り、物体ではなく人間への看護を行うために calling は欠かせないものであり、それを持ち続けるために看護の目的や行為に対して、看護師同士や監督者と共感するための時間と空間が必要だとしている。

また、『看護覚え書』において calling の語は八箇所記述されている。「換気と保温」で一箇所、「病人の観察」二箇所、「おわりに」一箇所、「補章」に四箇所である。calling すなわち「使命感」をもつ看護師とそれをもたない看護師の対比で説明され、看護師が自分自身の理念の満足を求めて病人の世話をするのでない限り、どんな指示命令によっても熱意をもち看護することはできないだろうと述べている。「使命感」をもつ看護師は、自分自身の理念の満足と、患者に対する関心に支えられて、患者を煩わせることなく、鋭い観察ができるとしている。